

「誰の前で生きるのか」

詩篇 第40章 9節～11節
テモテへの第一の手紙 第6章 11節～19節

説教 本庄 侑子 伝道師

ある時、テモテに手紙が届きました。信仰を、利得を得るための手段とする人々が教会に増大していたからです。私は教会から何をもらえるか。教会は私のために何をしてくれるか。そう考える人々の間に、「はてしのないがみ合い」、(5節)が生じ、「多くの苦痛をもって自分自身を刺し通した」(10節)人々もいました。

人が利得を求める場所は教会だけではないでしょう。私はこの会社から何をもらえるか。この学校で得をするか。夫は、妻は私にとって有益か。私たちは無意識のうちに利得を求め合い、奪い合うようにして生きています。そんな中、「しかし、神の人よ。」(11節)という呼びかけの声が届きました。この時のテモテに必要なだったのは、問題に対する具体的な解決策ではなく、自分が誰であるかと呼び覚ます言葉でした。

こんな話があります。迷子になったライオンの子が羊の群れを家族と思い生活し始めました。羊のように草を食べましたがあまりおいしくありません。首も痛みました。うまく“メー”と鳴きません。ある日、大きなライオンが現れてライオンの子に話しかけました。『おまえは何をしているのか分かっているのか?』ライオンの子は答えます。『僕は草を食べ、“メー”と鳴いています。羊はみんなそうするんです。』大きなライオンは大声で怒鳴りました。『お前は羊じゃない。水に映った自分を見てみなさい。』ライオンの子は水に映る自分の姿を見ました。そこにいたのは小さなライオンでした。その瞬間から、ライオンの子は本物のライオンになりました。ライオンと一緒に吠え、狩りをして生きていきました。自分が誰であり、どのような者になるように定められているのかを発見し、ライオンとして生きていきました。

「しかし、神の人よ。」そう聞いたテモテもまた、本来の自分の姿を発見したのです。そして、神の人本来の生き方を教えられていきます。

「信仰の戦いを立派に戦い抜いて、永遠のいのちを獲得しなさい。」(12節)この生き方に違和感を感じる方がいらっしゃるかもしれません。永遠の命は獲得するものではなく、イエス・キリストの贖いによって与えられる神の賜物だからです。この手紙は指導者パウロによって、もしくはパウロを名乗って記された手紙と言われます。福音の筋道を理解してはいたはずの人が、

あえて『永遠の命を獲得せよ。』と命じた背後には、神の人として長く生きてきたからこそその信仰生活の手触りがあつたのではないのでしょうか。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」(ヨハネによる福音書 17章3節)私たちは確かに、主イエスへの信仰により、神からの賜物として永遠の命をいただきます。しかしまた一方で、神を知り、イエス・キリストを知ることににおいてはまだ獲得すべきことがあるのです。

私たちが誰かのことを本当に知るのには、様々な出来事を共に過ごしてからではないでしょうか。同様に、洗礼を受け、神との関係が始まって、私たちが本当に神を知り、イエス・キリストを知るのには、「義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和」(11節)を追い求める「信仰の戦い」を経るからなのです。

それらを追い求める時、私たちはくり返し、できない自分と自身の罪に直面させられます。しかしその先に、「義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和」そのものであったキリスト御自身を見ることとなるのです。キリストは、十字架の死に至るまで神の義を求め、御心に従い、神に信頼なさいました。人々を忍耐強く愛し、柔和であられました。素晴らしい人格者として讃えられるためではありません。敵意の中、十字架につけられて死ぬことによって私たちの罪を赦し、神の人として歩ませるためでした。

御言葉は私たちを信仰の戦いへと召し続けます。神は、聖霊の助けを送り、御言葉を生きてくださったキリストと出会い直させます。痛み、傷つきながらも、私たちを愛するあまりに御言葉に従い抜いてくださったキリストと出会わせるのです。そうして、圧倒的な恵みによって私たちの限界を越えさせ、「義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和」というキリストご自身を獲得させます。神の人はみな、そのために召され、多くの証人の前で誓約をして洗礼を受けたのです。

「しかし、神の人よ。」私たちはみな、キリストの前で、永遠の命を獲得して生きるために、今朝ここに呼ばれたのです。

(記 本庄 侑子)